

翻訳

M・B・フォスター

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

永井健晴

内容

序文

第一章 政治哲学の対象としてのポリス(古典古代国家 *the Polis*)とステイト(西洋近代国家 *the State*)

補説A プラトンのポリスの三分割と労働分割(分業)との混同

補説B 立法者あるいは守護者であることは、「第二の教育」の成果なのか?

(以上 前号)

第二章 プラトンにおける正義(ディカイオシユネー)と自由
由「エレウテリアー」

補説C プラトンにおける教育と統治
(以上 本号)

第三章 ヘーゲルのプラトン批判:「主體的エレメント」
補説D プラトンにおけるソーフロシユネーという徳

補説E 「主體的自由」に関する他の言及とそれらの両義性
性を伴うヘーゲルのプラトン批判

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

第四章 「国家」における自由の条件としての法(法律・法則)

第五章 ヘーゲルにおける「市民社会」と「国家」

第六章 統治者と主権者

用語解説

索引

第二章 プラトンにおけるディカイオシユ

ネー(正義)と自由

形相 *form* は本質である、という教説は、「第一の国家」
[「ポリス」]において完全に例解されている。この共同体は、
それが分業(社会的労働分割) *the division of labour* という
形相 *form* を具体化する、という事実によってのみ、共同体

として構成され、その相似（形相の合致）conformityの厳密度に依じて、「正しいjust」ないしディカイオスと呼ばれている。また、職人craftsmanないしデミウルゴスは、この職人たちの国家「ポリス」の一メンバーであるが、彼の自然的な諸能力フアカルティーズの形相である一技能skillによってのみ構成される。この技能は、彼の徳virtueないしアレテーである。最後に、共同体の正義とそのメンバーの徳とは、この「第一の国家」シタイにおいては、相互的含意reciprocal implicationのきわめて緊密な絆によって互いに連結されている。職人の技能こそ、彼をこの経済的組織の一メンバーにする。この経済的組織に占める彼の位置こそ、彼の技能の発展を必然化し、そしてその位置だけがその発展を可能にする。

『国家』篇の政治的教説は、以下のような想定に基づいている。すなわち、これら全てのことは、理想的ポリスにおいて不変である。この理想的ポリスの本質はまた、一定の形相の具体化にある。そして、その完成化（潜在能力の実現）perfectionは、「正しく」あることto be “just”、あるいはその形相を厳密に具体化することである。市民の徳は、ディカイオシュネー（正義）、あるいは彼の魂soulの諸部分に付

与された形相にある。ポリスのディカイオシュネーと個人のそれとの間にはきわめて緊密な関連があるから、個人は彼の魂の正義によって国家の一メンバーとして構成され、逆に、政治的組織における彼の位置は、この個人的ディカイオシュネーの発展を必要とする。

だが実際には、この想定は崩れてしまう。「第一の国家」シタイと理想的ポリスとの間の実際の差異は、一方では、形相は現前presentし、他方では、形相は自己定立されるself-imposed、という点にある。かくして、一方の本質は単純にその形相によって構成されるが、これに対して、他方の本質は何か別のものに、すなわち形相をその国家そのものに定立せしめる国家内部の（統治階層の）活動the activityにある。同様に、職人の本質は、単純に、彼の技能は形相を付与されるinformedべきである、という点にあるが、これに対して、理想的ポリスの市民の本質は、彼の魂は形相を付与されるべきである、という点のみならず、彼の魂の一エレメント（理性的部分the reasoning part）は魂そのものに形相を付与する力the power of informingを持つべきである、という点にある。この差異は、次のように言うことによるのみ適切

に表現されうる。ポリスと魂との本質は、いずれも実際には形相 form では全くなく、精神 spirit であり、しかも、それゆえに、両者の徳ないし完成化（潜在能力の実現） perfection は、ディカイオシュネー（正義）ではなく、自由である、と。もちろん、プラトンは、その本質を、このように表現することも、概念把握 conceive することもできなかった。彼は、形相を定立する imposing form という活動を、それ自身もう一つの形相として、すなわち、国家のそれであれ、魂のそれであれ、三層的形相 the threefold form として、概念把握することができたに過ぎない。彼は、密かに、この（三層的）形相を、次のような特性 the characteristic として、すなわち、理想的ポリス（ないし政治的組織）を「第一の国家」（経済的組織）から、前者の市民を後者のメンバーから区別する、特性として、導入している。その場合、彼は、この（三層的）形相は、結局、「第一の国家」で実現されているいかなるものとも異なるものである、ということを確認しそこない、そして、ポリスにおけるこの（三層的）形相の現実化を、自然に具体化された形相の前者における回復としか見なさない。だから、彼は、ディカイオシュネー（正義）

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

という概念を拡張して、「第一の国家」の国制 the constitution やその概念が純粹に適合するそのメンバーたちのアレテーのみならず、理想的ポリスの三層的国制 the threefold constitution やその概念が純粹には適合しないそのメンバーたちのアレテーをもまた、カバーしている。

かくして、国家と魂における「三層的形相」についての教説は、それにとつては国家の本質は形相であり、そして、市民の本質は職人であることであるところの（「第一の国家」に適合した）観点の超越性と、そして、この観点が超越されることを認めることの拒絶とを、同時に表現している。政治的な結社 association を経済的な結合から、道徳的な卓越性 excellence を技術的なそれから区別するものは、もう一つの形相としてのみ概念把握され、したがって、統治者はもう一人の職人としてのみ概念把握されるに過ぎない。この章でのわれわれの仕事は、以下のことである。すなわち、いかにして『国家』篇のもっとも重要ないくつかの教説が、こうしたことから、つまり、われわれがそう呼ぶことを許されるようなプラトンの妥協から、生ずるのか、そして、いずれにしても、国家の本質は形相以上のものであり、市民の徳は単に

正義ジャスティスではなく自由フリーダムであり、そして統治者は（そして被治者でさえ）本質的には職人以上のものである、といった含意が、いかにして持続的に突出してくるのか、これらのことを示して見せることである。

この仕事を三つの部分に分け、第一に国家シテイにおける三層形相を、第二に魂ソウルにおける三層形相を、第三に両者の関係を考察することが便宜的であろう。

I

「第一の国家シテイ」の秩序はさまざまなテクネーを統一ユニテイ体へと凝集せしめる形相であり、その統一体は、それが知られると「*it is being known*」によって構成されていなかった、という意味で、そして、それが意識的・理性的な活動の所産ではない、という意味で、自然的なものである。三層秩序を理想的ポリスへの移行に際して導入することは、それが次のことを意味しないのであれば無意味である。すなわち、このポリスにとっては、実現される形相は、それ自身の中の一階層によって、つまり統治者によって、意識的に理解され、実現されるはずである、ということが本質的である、ということ

を。しかし、統治階層の地位および諸機能についてのプラトンの見解全体は、それらの活動を「第一の国家シテイ」においてすでに実現されている形相を再び定立することと *re-imposition* に制限する、という治しがたい傾向によって決定されている。われわれがすでに注意を促したように、この制限は一つのテクネーとしての統治ヤウリツウについての教説を性格づけている。そして、われわれは、この概念から起こる諸困難のいくつかと、それを支えることを唯一可能にせしめた混同、この両方を指摘した。われわれはさらにこれに、同じ教説から帰結する結論を、すなわち、統治者たちには他の全ての職人たちにまさる身分上の本質的な優位性が帰せられなければならない、ということをつけ加えなければならない。「第一の国家シテイ」の組織は、この優位性に匹敵するものを提供しなかった。そして、その優位性は、表面的に一瞥してさえ、正義ジャスティスの理想とはあきらかに相いれないように見える。

一 国家シテイがそれに固有の形相を具体化するに比例してディカイオッシュネー（正義）を成就するならば、一 国家シテイの完成化（潜在能力の実現） *perfection* は、この形相が現前していること *be present* であって、それが意思されること *be willed*

ではない。この帰結は、プラトンがいつも行っている正義と健康、支配者と医者との間の類比 analogy において完全に表現されている。健康な身体の実現 perfection に際して、その健康は意識的目的の対象とはならない。なるとすれば、そのことは健康ではなく心気症（ハイポコンドリア）（気病み）である。だから、もっとも健康な身体は、その健康が決して思考の対象にされなかった、ということである。疑う余地のないことであるが、一度この原初的な健康が失われたならば、それが回復されるのは医者の意識的目的によってのみである。医者は健康を構成する原理への科学的洞察を持っているからである。しかし、回復された健康は、少なくとも壊されない健康以上に大きな価値を持っていない。そこでその回復のためにさえ要求されるのは、患者の側におけるその原理への洞察ではなく、自発的なものであれ、強制されたものであれ、はたまたうましく騙されたにせよ、医者の命令に服従することである。

したがって、その国家の形相あるいは秩序は本質的なものであり、それを達成させる諸手段は二義的な重要性しか持たないから、その秩序は従属者の私的判断に気に入られる必要はない。ポリスの秩序がその中の誰一人にも自由な同意を命

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

じないのであれば、すなわち、それが第一の国家において意識的に是認 approve されているのではなく無意識的に従われている秩序であるように、それが受容されているというよりもむしろ拒まれていない秩序であるならば、われわれが見たように、それはディカイオシュネーの理想を傷つけないであろう。この秩序を回復することは、一度それが攪乱されたならば、私的判断の是認 approbation を要求する。それを回復すべき人たち、つまり統治者たちは、第一にその必然性の根拠を理解しておかなければならないし、彼らの仕事は、それが実現する原理の意識的な受容によって、形相を付与されなければならない。しかし、その場合でも、回復されたポリスにおいてさえ、この是認は普遍的に必要なわけではない。それが従属者たちにおいて現前している必要はない。従属者の従属こそが重要であって、彼の従属の根拠はどうでもよいことである。彼が従う秩序が彼の私的判断によって是認されることは必要ではなく、必要なのは彼が私的判断の権利を放棄することだけである。

統治は、一言で言えば、言わば正義の回復と維持であり、統治者 the ruler の側に彼が定立する秩序の諸根拠への洞察

を要求するが、しかし従属者 the subject の側には彼が従う秩序の根拠への洞察を要求しない。

統治者 rulers と被治者 ruled との身分の違いは、プラトンの統治理論 theory of government 全体の理解するための鍵である。従属者たちは同調 conform しなければならないが、しかし同意 consent する必要はない。したがって、ポリスの秩序が理性的なものでなければならぬとしても、それが彼らの理性に訴える必要はない。かくして、検閲 censorship と薬としての虚偽 medicinal lie とは、統治の適切な道具である。だから、プラトンにとって、罰(処罰) punishment という問題は生じえない。なぜならば、従属者に対して実行された強制 coercion は、それは彼の患者の〈善きこと〉のためであって、彼自身のそれのためではない、という医者によって課された抑制 restraint と同じ明白な正当化を、持つだろうからである。そのように課された抑制は、全く罰ではない。それは統治 governing の一つの方法に過ぎない、すなわち、それによって統治者が秩序を定立し、維持するという自分の仕事を遂行するところの、苦痛と快楽というの二つの大きな道具の一つを、適用することに過ぎ

ない。罰が統治と区別されうるのは、それを加えるために、それによって改善されるべき従属者 the subject の許容能力以外の何かの条件が要求されるとき、このときのみである。それが一つの問題になるのは、従属者(主体) the subject は、患者ない子どもと違って、彼の従属 submission を要求する秩序に同意 consent していたに違いない、と想定されるときのみである。なぜならば、そのとき、いかにして従属者(主体)の同意 the consent は、彼の同意にまさるという点で統治者 governor を正当化しうるか、という問いが生じるからである。

プラトンはいつも統治者 ruler と服従者 subject との関係を職人と彼の材料との関係の類比で概念把握しているわけではないし、医者アニメイト・マテリアルと生きた素材つまり患者との関係の類比でさえ、いつもそうしているわけではない。彼はそれをむしろしばしば教育者と生徒との関係として考えている。統治 rule と教育 education、アルケーとパイデアー(5)は、彼にとって同じ事柄の二つの名前であり、国家における従属者には、生涯教育が行われる。

実際、職人と従属する材料の関係と教師と生徒の関係との

間には、重要な差異がある。プラトンが区別なしに二つの類比を用いているのは、統治者たちは彼らより劣位にある二つの階層の各々に対して同じ関係にない、ということに彼が認識していないからに過ぎない。補助者たち the Auxiliaries は彼らの生徒であり、第三階層は彼らに從属する材料である。しかし、これらの関係の差異は重要であるにしても、われわれがここで重視しようとする論点に影響を与えない。教師と生徒との関係は、職人と材料との関係におとらず、前者への後者の從属を、示唆している。しかも、それは同じ理由のためにそうなのである。すなわち、生徒は何になる素質を持っているのか、についての知識を、教師は持っているが、生徒は持っていないからである。生徒に加えられる苦痛は、患者に加えられるそれがそうでないのと同じく、司法上の（公正な）罰ではないし、いわんや彼の私的判断の同意はその正義の条件でもない。

その目的は生徒の解放 emancipation である、という教育の特性さえ、この解放はプラトンの国家においては政治的な從属関係 subordination からの彼の解除と一致する、というきわめて意味深長な事実ゆえに、問題外 irrelevant となる。

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

生徒が理性を使用しうるようになり、つまり大人となり、国家の責任を負う主体 subject となったならば、プラトンはまさしく、本質的に平等な人々の間の政治的な從属を正当化するという問題に直面することになっていたのであろう。しかし、「生徒の身分」 status pupiliaris からの解放は一個の人間に主体ではなく彼自身統治者になる資格を与えるから、生徒に対する教師の関係における特殊性は、統治とテクネーとの比較において示唆されている統治理論 the theory of government の一すなわち、政治的な從属関係は被治者 the ruled に対する統治者 the ruler の本質的優位性によって正当化される、という理論の修正を何ら必要としない。⁽⁶⁾

かくして、プラトンの統治理論は揺るがず、統治者が職人ではなく教育者にされるならば、それだけより確固としたものにされる。テクネー・アナロジの欠陥、すなわち、それが統治活動に対するあらゆる反省作用 reflexive operation を否定する、ということ、このことは教育のアナロジによって、埋め合わせされるのではなく、共有される。われわれが前章で見出したところによれば、プラトン自身の議論の論理が、統治 ruling はこの反省的性格 reflexive character ゆえ

に一つのテクネー以上のものである、という結論を要求している。そして、いまやわれわれは、次のことを示さなければならぬ。こうした結論を引き出すことが、いかにして同時に、プラトンにとって明白に思えた身分statusの差異を疑問に付し、そして彼の統治理論が基礎にしている土台全体を揺るがすか、を。統治はテクネー以上のものである、ということ必然化した同じ議論が、それは教育以上のものである、ということをも必然化するから、統治の前者の概念についての以下の章で述べられることは、必要な変更を加えるならば、*mutatis mutandis*、その後者の概念にもまた拡大されよう。

われわれの見たと同様、統治者たちは、デミウルゴスとして彼らが持たなければならぬ彼らの質料の形相への洞察力だけでなく、彼ら自身がその質料であるところの形相への洞察力を与えられるはずである、という結論は不可避である。⁽⁷⁾

しかし、統治者がこのように職人の視野の諸制限から自由になりうるとするならば、他のデミウルゴスたちは何故そうではないのであろうか？すでに見たように、そもそも職人の洞察力のこの想定された制限だけが統治者階層の導入を必然化したのである。⁽⁸⁾ 一人の人物が、統治者が、彼の力（職能）

craftの制限を越える能力を持つと見られたからには、この同じ能力は万人においては想定されない、という理由は原理的に存在しない。一度それを想定するなら、統治者たちの階層classは余計なものとなる。ポリスのメンバーたちは、彼らが「第一の国家」^{シテイ}でそうであったように、守護者階層the class of guardiansが導入される以前の互いに平等の状態に戻ることになろう。テクネー・アナロジーの中に含意されている諸制限からの統治者たち自身の解除liberationは、彼ら自分たちの優位な地位station of pre-eminenceを放棄することを要求する。

「市民たちは『第一の国家』^{シテイ}の平等に戻るであろう」。しかし、これは実際には復帰^{リターン}ではない。「第一の国家」^{シテイ}の平等は、無知の平等であった。人々が平等であったのは、誰も自分の職能^{クラフト}の諸制限を越えなかったからに過ぎない。しかし、要求されている平等はソフィア（知恵）の平等であって、ここでは万人が諸制限を越えているはずである。要求されることは、統治階層^{ポリシヤ}の廃棄ではなく、従属階層^{サフジエイト}の廃棄であり、そして、守護者たちが支配することを資格づけた同じ知恵を全ての市民が平等に持つことである。このような一国家^{シテイ}は

「第一の国家」がそうであるような自然的共同体とは異なっている。—プラトンの理想的ポリスがそれとは異なっているように、それ自身の中に全体に形相を定立しうる一階層を持っていることよってのみならず、それ自身総じてそれ自身に形相を定立しうることよって。この能力によつて一共同体は自由なそれと呼ばれるからである。

かくして、国家への三層形相の導入は、正義の理想からの逸脱 declension を含んでいるが、しかし自由の理想への前進をも含んでいる。

II

自由という用語は、ディカイオシュネー（正義）という用語と同じく、さまざまな意味で社会やそのメンバーに適用される。ホップズは、ルッカという自由都市について、次のように述べている。その都市はその小塔の上に大文字でリーベルトアス LIBERTAS という語を書いたにもかかわらず、「そこから、いまだ誰も、個々人が、コンスタンティノポリスにおけるよりも、より多くの自由 *Liberthie* を持っている、あるいはそこでの国家への奉仕から免除されている、とい

うことを推し量ることができない」、そして、国家の自由とそこにおける個人の自由との間の対照は、プラトンが自覚しているポリスにおけるディカイオシュネーと魂 *the soul* 「ブシケウ」におけるディカイオシュネーとの間の対照と類比的である、と。われわれはいまや後者のことに執りかからなければならぬ。

人間の形相の実現 *the realization of the form of man* としてのディカイオシュネー（正義）という概念は、「第一の国家」のメンバーにおけるその完成化（潜在能力の実現）*perfection* において例証されている。人間はここでは自然的な種 *species* と見なされ、そして、彼がここで成就するディカイオシュネーは、一つの自然的な種 *a natural species* として捉えられた人間性の本質の実現である。この種 *the species* の類 *the genus* は動物であり、その種差 *differentia* は合理性である。人間のこうした概念の特徴は、理性 *reason* は人間を自然的な種から区別 *differentiate* するものとしてではなく、人間を自然的諸種の間で区別するものとして見なされる、という点にある。人間が自分の類的自然本性 *generic nature* を、自分の種差 *specific differentia* において、

そしてそれを通じて充たすとき、人間の本質は実現されるであらう。彼は類ジューナスによって動物であるので、彼は自分の類的自然本性を、自分の動物的必要欲求の充足及び自分の自然的能ファカルティーズ エクササイズ力の行使において満たすであらう。しかし、彼は種差 *differentia* によって理性的であるので、理性の適用によってこれらの必要欲求を充たし、理性の導きの下にこれらの能力を行使するかぎりにおいてのみ、自分の真実の本質を実現するであらう。理性は目的への諸手段の意識的な適応アダプシヨにおいて発揮ディスプレイされる。理性的な被造物の活動アクティヴイティは、それが実現されるべき形相ないし目的をあらかじめ知性によって理解すること *the precedent intellectual apprehension* によって決定されている、という点で他の動物のそれから區別される。言わば、デミウルゴスであること、そして一つのテクネーを行使することは、人間の特徴的かつ典型的な活動である。

この活動アクティヴイティの実行は、彼の職能クラフトの材料マテリアール（質料）にだけでなく、職人自身クラフトマンの自然的能ファカルティーズ力にもまた、一つの形相を定立付与（付与）すること *the imposition of a form* を、含んでいる。彼が自分の材料質料に形相を定立できるのは、

獲得された技能スキルによってのみである。この技能は、彼が自然本性によって持っている諸能力に別の能力を付け加えることではない。いかなる訓練トレーニングも、このようにして自然が与えたものに加わりえない。そうではなく、この技能は、彼がすでに持っている諸能力 *faculties* に「形相を付与すること *information*」、あるいは、諸能力を組織化することである。形相は彼の本質であり、そして、彼の諸能力が形相を付与される度合い *the degree to which his faculties are informed* は、彼の徳器量 *virtue*（アレテー）の尺度である。これは、彼をして「善き大工」ないし「善き靴作り」にせしめ、あるいは彼の職能が何であれ、それに「習熟 *good at*」せしめるところのものである。彼の職能クラフトの所産は、エルゴンないし製作物ワルク（作品）であり、彼が習熟している *good for or at* ところのものである。

かくして、一個の人間の完成パイクシヨ（潜在能力の実現）は、特殊な自然的能力の所有にではなく、彼の自然的諸能力の形相にかかっている。このことは道具トールのアナロジーによって例示されよう。金槌の本質を構成するのは、頭部の硬さでも柄の長さでもなく（すりこぎ *pestle* は固い頭部を、マレット

mallet は長い柄を持つてゐるであろうが)、釘を打ち込むという目的へのその適合性 suitability だけである。これは、何らかの性質 quality であることではなく、各部分の性質を決定する形相 the form である。この適合性は金槌のアレテであり、釘を打ち込むことはそのエルゴンであり、そのアレテを実現させる仕事(製作)である。全く同じように、一職能に就いた一個の人間の技能は、何ら単一の能力の肥大化 hypertrophy にかかつてゐるのではない。そうではなく、その技能は、諸能力の調和ないし組織化であり、彼固有の仕事の最善の遂行に適合してゐるようなそれである。諸能力のこうした組織化は彼のアレテであり、彼のエルゴンはその仕事の遂行である。

個々の人間の形相 the form としてのディカイオシュネー(正義)というプラトンの理想は、「第一の国家」のメンバーである職人のアレテにおいて完全に実現される。しかし、後に魂 the soul において区別される二つのエレメントの形相として、それを概念把握することが企てられると、ディカイオシュネーというプラトンの理想は崩壊する。国家においてと同じく魂において、三階層の形相 the threefold form を

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

導入することは、ディカイオシュネーの理想からの逸脱を、しかしまた自由の理想への前進を、表現している。前者「ディカイオシュネーの理想」に含まれる概念からすれば、人間の本質は彼の種的形相 specific form であり、そして、彼の徳は、それに伴つて個人において形相が実現される完成化 perfection のみにかかつており、それによつて個人において形相が実現される諸媒体(手段) means には全くかかつていない。それゆゑに、職人の諸能力にそれらの形相付与作用 information を受け取らせた訓練は、彼自身の洞察によつてよりも、むしろ他者のそれによつて方向づけられ(指令され)ていたとしても、このことは何ら職人の徳 virtue の欠陥とはならない。彼が職人であるかぎり、彼の意識は、自分が自分の材料(質料)に定立しなければならぬ形相を、もつぱら志向し、彼の目は、内向きには、彼自身の能力に定立されるべき形相には、決して向けられていない。職人の完成化はまた、彼の種の本質 specific essence の実現に、すなわち、彼が同じ職能を他の全てのメンバーと共有する(技術的という意味で)合理的な活動の潜在能力 capacity の実現にある。個人的 individual なことは、いずれも彼の本

質にとつては偶然的なことであり、その個人的なことの
 実^{リアライゼーション}現は彼の完成化^{パーフェクション}とは何ら関わらない。しかし、自由⁽⁹⁾
 という理想に含まれる概念からすれば、人間のアレテーは、
 道徳的な徳 moral virtue、すなわち、それについての人間自
 身の自覚的^{アプリーハンション}理^{アプリーハンション}解なしには魂に定立されえない一形相であ
 り、そして、個々の人間の本質は、彼自身に個人的 individual
 nalなものであつて、彼の種 species に共通のものではない。
 —ということとは、それはそもそも形相の中にはないわけであ
 る。

プラトンが三階層区分 the threefold division を魂の中に
 導入するとき、彼は次のことを当然視している。すなわち、
 技能^{スキル}は自然的諸能力^{フアカルティーズ}の形相である、ということと正確に同
 じ意味で、デイカイオシュネーは、その三つのエレメントの
 形相として概念把握されうる、ということ。だがしかし、
 この想定は、それがはっきりとは疑問に付されないとしても、
 三階層区分の教説から実際に引き出される諸々の結論と矛盾
 する。この想定が真実であるとするならば、それ自体しかも
 単純にこの形相の質料として考えられる三つの部分のいずれ
 もが、自余のいずれに対しても内在的優位性を持ちえず、

実際、いかなる内在的価値ないし「徳」"virtue"もおよそ持
 ちえない、ということになる。アンドレイア(勇氣)ない
 しソフィア(知恵)の所有、あるいは欲求のエレメント the
 appetitive element の發展は、腕の力や目の鋭さのような特
 殊な自然的素質 gifts が職人の完成化^{パーフェクション}にとつて偶然的 acci-
 dentalである、ということと正確に同じ意味で、一人の人
 間の完成化にとつて偶然的である、ということになる。—
 もちろん、いかなる技能^{スキル}も、このような素質^{ギフト}という質料 the
 material に基づかず^{ギフツ}に發展されうる、という意味において、
 そうだということではないが。一人の人間は一定の腕の力なし
 には善き農夫になりえないし、一定の目の鋭さなしに善き時
 計作りにはなりえない。そして、盲目で手足が萎えていれば
 そもそも善き職人にはなりえないであろう。しかし、もちろ
 ん、これらの素質のいずれかの特殊な發展それ自体は、一人
 の職人としての人間の實現にとつて本質的ではない、という
 意味において。時計作りは一方のものなしにデミウルゴスの
 最高の完成化^{パーフェクション}を達成し、農夫は他方のものなしにそれを達
 成するかもしれない。一個のデミウルゴスとしてのアレテー
 を構成するのは、特殊な諸能力に定立されている形相であつ

て、何らかの能力フアカルティそれ自体の徳 virtue ではない。

しかしながら、魂における個々の部分の徳は、このように、一個の人間の完成化パーフェクションにとっては偶然的なものである、とはプラトンは決して考えていない。⁽¹⁰⁾ 彼がそう考えているとすれば、プラトンが、彼の魂のディカイオシュネー(正義)においてではなく、その個々の部分の徳において、従属者 a subject に留まっている、単なるデミウルゴス—こうした単なるデミウルゴスを凌駕する統治者ないし戦士を、前者よりもより卓越したタイプの人間性 manhood を構成するものと見なすこと、あるいは、その目的がアンドレイア(勇氣)とソフイア(知恵)それぞれの再生産であるところの、守護者たちの二つの教育 educations を、デミウルゴスの訓練 training よりも、より重要視することは、不可能であろう。一言でいえば、そうであれば、プラトンが知恵 wisdom や勇氣 courage を徳 virtues と見なすことは、そもそも不可能であろう。ディカイオシュネー(正義)を魂の三部分の形相と呼ぶことは、次のように想定することである。すなわち、ヘテューモス(気概的なもの)とヘト・ロギスティコン(理知的なもの)、「精神的」"spirited" 部分と合理的諸部分は、それ

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

ら自身、形相を所与として持っている be formed のではなく、特殊かつ自然的な、それゆえに質料的 material な、諸情念 passions と等しく、形相を受け取る潜在能力を持っている capable of receiving form と。ヘテューモスとヘト・ロギスティコンが自然本性的なものでなく、教育(すなわち、形相付与 information)の所産であり、したがって、それら自身、普遍的なものによって形相を付与される be informed ことが明らかになるとすれば、それによってこれら三つのエレメントが統一性において関係づけられると想定されているディカイオシュネーは、形相を質料と統一する一つの形相という概念に劣らず、厄介 vicious で役立つず otiose な概念ということになる。このような一つの形相という概念が厄介であるのは、その概念が、形相はそれ自身も一つの特殊なものに過ぎない、ということを含意するからであり、その概念が役立たずであるのは、形相がその質料に統一されるのは、もう一つの形相によってではなく、現に向かうそれ自身に内在する衝動 impulses によってであるからである。なるほど、もちろん、ヘト・ロギスティコン(理知的なもの)もヘト・テュモエイデス(気概的なもの)⁽¹²⁾も

魂の形相であるわけではない。しかし、それらが自然的な諸能力の間で互いに区別されうるのは、それらが、一方は、この形相を積極的に知ろうとする魂の中の能力として、他方は、形相を積極的に意思しようとする能力として概念把握されるかぎりにおいてである。この形相を諸情念 *the Passions* に付与し、かくして魂の三部分の統一を構成するものは、実際には形相そのものの衝動 *nisus* ではなく、いわんや他の形相ではない。それは形相を知ろうとし意思する主体の活動 *the activity of the subject* 以外ではない。この弱点は、ポリスなしい魂における三階層の形相についてのプラトンの教説における同じ弱点である。すなわち、プラトンは、それによつて彼が形相を実現する活動をそれ自身一つの形相以外の何かとして表現しうるであろうところの思想（思惟カテゴリー 1）*Thought* ないし言語の資源を、持っていないのである。われわれが詳細に示して見せなければならぬのは、いかに、魂の三階層区分についてのプラトンの教説は、事実上、次のことを示唆しているか、ということである。すなわち、ヘト・テュモエイデス（気概的なもの）とヘト・ロギステイコン（理知的なもの）は、それらはダイカイオシュネーに

よる形相付与 *information* のための質料である、という想定とは矛盾する意味において、それら自身、形相を付与されている *be informed*、ということ。そして、この示唆は、それに伴って、人間の自然本性についての新しい概念をもたらす、この新しい概念に従えば、人間固有の徳は、正しくあること *to be just* ではなく、自由であること *to be free* である、ということ。

ヘテューモス）がその最初の導入において自然的諸情念と区別されていないことは、意味深い *significant*。⁽¹³⁾ しかし、たちまちプラトンは、この区別を、⁽¹⁴⁾ それどころか、この導入時の想定⁽¹⁵⁾ の明確な撤回を、強いられる。その卓越性⁽¹⁶⁾、アンドレイア（勇氣）は、生まれの偶然性 *an accident of birth* に帰すことはできず、理性によって方向づけら（指令さ）れる教育によつて産出される、ということがまもなく明確になる。ここから、それは一つの特殊な情念、本能⁽¹⁷⁾ 能ないし欲望ではない、ということが帰結する。というのは、教育も理性も、自然の機能を奪い取り、人間という動物が自然から与えられている諸能力を増進⁽¹⁸⁾ することはできないからである。理性の固有の対象は、その理論的な仕事⁽¹⁹⁾ 事においてであれ、こ

こでのように実践的な仕事においてであれ、形相であって、質料ではない。学問においてそれが形相を知るように、教育や統治^{レリツグ}においては、それは形相を産出し、あるいは、その言葉の二つの意味のそれぞれ一方ないし他方において、形相を付与^{インフォルム}する。したがって、アンドレイア(勇氣)は、それが教育の所産であるかぎり、高度の情念ではなく、諸情念の一形相である。そして、その卓越性^{エクセレンス}がアンドレイア(勇氣)であるところの「ヘテューモス」は、他の諸情念間の一つの情念ではなく、形相を付与された informed これら諸情念である。

諸情念の形相付与 the information は、一個人の統一性 the unity を構成する。「精神化された」行為 'spirited' action は、かくして自我全体 the whole self によって導かれた行為であり、いかなる特殊な情念ないし欲望^{デザイア}も抑制せしめることになる⁽¹⁶⁾。「精神」は自我の不可侵性 the integrity of the self への脅威^{スレツク}によって、すなわち、苦痛や害を与えるもの、剝奪^{リベントメツト} privation によってではなく、侮辱 indignity によって、憤怒^{リゼントメツト} を呼び覚まされる。しかし、ギリシアの理論においていつもそうであるように、個人の本質を構成する形

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

相は、その個人を、同時に、一つの超個人的システムに従属させる(自然的対象の本質が、諸々の種のヒエラルヒーにおいてそれにその位置を指定する特殊な形相であるように)。そして、形相の実現は、どんな所与の個人であれ、その保存ではなく、その無化 the annihilation を要求するであろう。かくして、通常個人的自我の主張 the assertion of the individual self において表現される同じアンドレイア(勇氣)は、その否定 the negation において表現されるであろう。そして、勇氣の至高の行為^{アクト}は死に直面することである。⁽¹⁷⁾このことが逆説的に響くとすれば、通常個人の生存闘争において表現される、動物における自己保存という、不適切に呼ばれた「本能」は、種の永続化がそれを要求すれば、同じく個人を自己破壊にもたらしつかもされない、ということをおわれわれは反省するであろう。

動物たちの行動 behaviour は自由ではない。そしてもし「テューモス」が自己保存の本能以上のものでないとするれば、アンドレイアは自由の理念の萌芽さえ含まないであろう。自由な行為は、単に自我によってのみ導かれるのではなく、人に自分の利害を主張することを強いる自利 the self-regard

の形式であれ、彼にそれを放棄することを、そして、勇敢な人には彼の生命を犠牲にすることを、強いるかもしれない自尊 the self-respect のそれであれ、自我の概念 the concept of self によって導かれる。プラトンのテューモスを自尊 “self-respect” と翻訳することは、行き過ぎである。自己知識、自己統治、自己実現といった一反省リフレクションの全ての概念は、ギリシア思想には縁遠く、ギリシアの哲学者たちは、ここかしこで至高の洞察の瞬間においてのみ、それらの明確な承認に達しているに過ぎない。これら両極端の中間にあり、互いに明確には差異化されないこと、これが名誉 honour というプラトンの概念の本質である。プラトンの戦士 warrior が無価値の衝動イムパルスを撥ねつけるとき、それが単に自然的「本能」に盲目的に従うことではないことは確かである。しかし、それはアンシャン・レジーム下のフランス紳士の行為アクションと同一であるわけでもない。フランス紳士は自分の名誉が要求することを概念的に把握すること conception によって動かされるからである。プラトンの戦士が「高貴なことの⁽¹⁸⁾ために」自分の命を投げ出すとき、その種 species の諸要求がその子を守るトゲウオを動かしているように、彼の目的 end が実際

に全く無意識的に彼を動かしているわけではない。しかし、それが一つの目的として彼の意識に十全に現前しているわけでもない。

単なる動物的なものとは区別されるがゆえに、「テューモス」は自由意思 free will の一理念の萌芽を含んでいる。プラトンはそれを展開しなかった。なぜならば、彼は人間と動物の間のコントラストを充分には意識していなかったからである。⁽¹⁹⁾守護者の徳についての彼の概念は、一貫して、動物とよって展開されている。勇敢な人間が死以上に恐れるのが、奴隷の境遇である。⁽²⁰⁾まさに奴隷は、自分の生命を投げ出すか、あるいはそこにおいて自己を主張するか、いずれかができない。奴隷制は如何なる単一の情念ないし欲望も抑制する必要がない。奴隷制が本質的に抑制するのは、これらの欲望を束ねて一つの自我 self にすることである。疑いもなく、奴隷の諸々の欲望や情念は、それらが主人によって指プリスクライプ示された一つの目的エンデに基づき方向づけら(指令さ)れているかぎり、一つの命令ディシプリン(秩序)及び一つの規律を受け入れる。疑いもなく、もし主人が公正 just ならば、この目的は正しいも

の light であり、そして奴隷は服従によって彼の自然本性の適格な完成化を成就する。彼がアンドレイアを欠いているのは、彼が自分の行動の正しい方向づけのための外からの指 令に依存し続け、そして原理を自分自身の魂の中に決して同化しないからである。彼は決して、アリストテレスが倫理的訓練 ethical training の期間と見なす段階を、すなわち、生徒が他者の指 導で正しい行為を果たすのを止め、彼自身のうちにある原理によって自発的に正しい行為をするようになる段階を、通過しない。このような原理を行使すること、不断の指 示なしに正しい行為に向かうこと、これはアンドレイアの徳である。そして、それが指示からの解 放を含蓄していることは明らかである。一人の間人は、彼が彼自身の主人であるかぎりでのみ、アンドレイアを実現することができる。

ところで、自分自身の主人になることは、自由であることである。ドゥーロス、奴隷の反対のものは、エレウテロス、自由人である。アンドレイアが奴隷であることに對置されるという単純な事実は、自由について何らかの概念がその中に潜在していることを十分な証拠づけている。⁽²¹⁾ —われわれがそ

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

の用語ともっとも容易に結び付けるどんな概念ともどれほど異なっているとしても。たしかに、アンドレイアが自由であるのは、彼の行動が、それは正しい、という知識によって決定される、という近代の合理主義的道德 Rationalist morality の意味においてはではないし、それが彼の好尚 *his own* 以外の何かによって決定されない、という近代の経験主義 Empirism の意味においてもでない。前者の自由のような何かを成就するためには、アンドレイアより高次の徳、ソフィアを持たなければならないであろう。後者の自由のような何かを成就するためには、アンドレイアそのものを放棄しなければならぬであろう。アンドレイアは、われわれがその言葉の異教徒的な意味 the Pagan sense と呼ぶような何かにおいて自由である。それはギリシアの自律的な都市国家の自由な市民 the free citizen の徳である。

われわれは自由のこうした概念の一つの消極的性格に気がくかもしれない。それはストイシズムのよって導入されキリスト教によって採用された自分の主人であること(自己支配) self-mastery という反省的な意味付け reflexive significance を欠いている。支配 mastery への従 属から解 放さ

れているアンドレイオス（勇者）が行使するのは、自分自身を支配することではなく、自分自身が他者を支配することであるから、彼の自由の実現は奴隷制度 slavery を前提にしている。そして、いずれかが彼の目的を実現することになるとすれば、奴隷が彼にとって必要であるほどには、彼は奴隷にとって必要ではない。

この理由のために、プラトンのポリスにおける守護者たち guardians のアンドレイア（勇氣）は、それを持たない階層が現存することに依存している。プラトン自身は、自分自身の主人になることは無意味な概念である、と主張し、⁽²²⁾そして、魂は諸部分を持つ、という結論を引き出している。彼のポリスにおける諸階層の不平等は、同じ否認からの結論に他ならない。

守護者たちという最高の階層にとって特殊な徳は、ソフィアないし知恵 wisdom である。それはヘト・ロギステイコン（エクセルシウス）の卓越性、それによってロゴス、形相ないし秩序の原理を理^{アフリヘンド}解することが可能になるところの、⁽²³⁾魂のエレメントである。それゆえに、それを所有することは、

一つの法律を新たに規^{アリスクリイプ}定すること、あるいはそれが一度失われたならば、意思されない自然的秩序を回復すること——このことが仕事であるところの人々にとって、文句なく必要なことである。少なくとも守護者たちのこれらの行為は、^{オビドイエンズ}服従という行為ではなく立^{ロー・キウイング}法という行為は——カントが、自由な行為 free acts は一つの法との合致 accordance with a law においてではなく、一つの法の概念把握 the conception of a law によって決定される、と明言したとき、彼が表現した自由の条件を充たしている。統治者たちの機能は、他者たちに対して法を規^{アリスクリイプ}定すること以上のことでなければならぬこと、あるいは、彼らがまた自分たち自身に対してもまた法を与える（立法する）ことは論理的に必然的なことであること、このことを認めることをプラトンは躊躇するのであるが、このプラトンの躊躇はいかに殆んど克服し難いこととであったか——このことをわれわれはすでに見た。もし彼がこれを認めていたならば、彼の統治者たちは、そこでは「われわれがわれわれ自身に規定する法に服従することが自由である」というその後のルネサンスの意味で、自由を享受していたであろう。もし彼が法の原理への知的洞察を、法を規定

すること prescribing a law の前提条件だけでなく、それに服従することの前提条件にしていたならば、もしも彼が言わばディカイオシユネー（正義）とおなじくソフィア（知恵）を国家シテイのあらゆる階層の普遍的な徳としていたならば、そのとき自由は彼の政治的社会的根拠かつ目的としての正義の位置を占めていたであろう。そして、プラトンのポリス the Platonic Polis はヘーゲルのステイト the Hegelian State に取って代わられていたであろう。⁽²⁴⁾

ソフィア（知恵）についてのプラトンの教説に含意されたもつとも重要なこと、そしてその教説にこれらの発展の可能性を含ませたことは、以下のことである。ソフィアという徳が依存するのは、ディカイオシユネーという徳がそうであるように、それに伴って形相が一個の主体の中に実現リアライズされるころの完成化パーフェクションではなく、それによって実現リアライゼーションがもたらされるところの活動 the activity である。この活動アクティビティの発条は、形相の中ではなく、形相を付与されるはず to be informed の実体サブスタンスの中に、魂に定立されるはずの to be imposed（三階層の）形相の中ではなく、この形相が付与されるはずの魂の「質料」matter の部分の中に、ロゴスの中にではなく、

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

ヘト・ロギスティコンの中にある。⁽²⁵⁾ このことは、次のような帰結を含んでいる。すなわち、その魂の「質料」は、形相を受動的に受け取るもの the passive recipient ではなく、それによって形相が実現されるところの活動の源泉であり、そして、その特殊性は、それゆえに、その完成化にとって偶然ではなく、本質的である、ということに鑑みるならば、魂は何らかの自然的実体あるいは何らかの人為の所産かのいずれのそれとも全く異なる自然本性を持っている、という帰結を。以下の章でこの帰結をさらに充分に展開するつもりである。ここでは次のことだけを付け加えておきたい。すなわち、この結論は、プラトン自身を、彼がそれを想定することによって出発したところのものはラディカルに異なる人間の本質についての一つの教説へと導き、その結果、彼はヘト・ロギスティコン（理知的なもの）⁽²⁶⁾ について、単に人間にとって本質的なものとしてだけでなく、人間の本質全体として、語るようになる、ということ。⁽²⁶⁾ このことは次のことを意味している。すなわち、人間の本質は、もはや特殊（種）的 specific なものではなく、個体的 individual なものであり、人間の完成化パーフェクションは、一つの形相の実体になることではなく、

一つの活動の主体 subject of an activity になることである、ということ。かくして、プラトンは、はじめてこの結論を明確に思想化したデカルトを先取りしている。もっとも、それはおそらくもっとも基本的な原理としてキリスト教の中に含まれていたのであるが。

三部分の組織化 tripartite organization についてのさらなる帰結を無視するわけにはいかない。われわれが見たように、そこから帰結するのは、二つの人間の卓越性、ソフィアとアンドレイアを、守護者階層に排他的に帰属させることであり、そしてそれゆえに、守護者と生産者との間の必然的不平等である。しかし、この不平等は全く一面的であるわけではない。統治と戦闘を行う階層が魂の一つの本質的なエレメントのそれぞれ排他的な担い手であるならば、生産者階層もまたそうである。この生産者階層においてのみ、すなわち、金銭獲得術「クレーマティステイケー」⁽²⁸⁾という活動においてだけ、欲望のエレメント、魂の第三エレメントは、その固有の自然的な充足を受け取る⁽²⁷⁾。

クレーマティステイケー（金銭獲得術）は、それ自身一つ

のテクネーであり⁽²⁹⁾、そしてそれゆえに、それを単一階層へ専門化すること specialization は、どの人間的な卓越性^{エクセレンス}の一件でもある分業 division of labour の一適用以上のことではない、というのがプラトンの導入的教説である。もしこの教説が支持されうるとすれば、統治者は、これから排除されているからといって、その分だけ一個の人間ではないというわけではないであろう。靴作りは大工ではないからといって、より悪しき職人であるというわけではないであろう。しかし、この教説は、統治と戦闘はいずれもテクネーである、という類比的な教説が支持されえない以上に、支持されえないであろう。そして、三階層の形相の導入は、それら三つ全ての同様の挫折 the break down をはっきり示している。国家^{シテイ}における第三の階層は、多様なテクネーによって構成されている。もしクレーマティステイケー（金銭獲得術）が純粹に一つのテクネーであるならば、それは単にそれらの間の追加的なテクネーであり、そして生産的な諸々のテクネー Technae を、単一の階層 class に構成するものは、そもそも何も無いことになろう。それゆえに、プラトンはクレーマティステイケーを、第三階層そのものの特徴を際立たせるものとして⁽³⁰⁾、

言わば、生産的テクネー全てに共通する性格として、捉えることを強いられる。まさしく一つの欲望的な自然本性 *appetitive nature* の表現は、一個の人間が彼の特殊な職能 *craft* から独立して持つものであり、それゆえに、一つの特殊なテクネーとして実現されうるのではなく、それぞれの職人 *craftsmen* によって、彼の特殊な仕事 *work* (製作) において、そしてそれを通じて実現される。したがって、こうした活動から排除されることによって、守護者 *guardians* は、どの職人も *specialization* によって制限されている、という意味で、すなわち、一つの生産的職能を採用したことで他の二者択一的可能性を放棄しなければならない、という意味で、単純に制限されているわけではない。守護者はそもそも、どのような生産的仕事 (制作) への参加からも排除されている。守護者を生産的労働から排除することは、プラトンによって誤って労働の専門化 *the specialization of labour* の一ケースとして表現されている。⁽³¹⁾ そして、統治というテクネーのクレーマティステイケー (金銭獲得術) からの分離は、誤って他の諸職能の類比によって支えられている。⁽³²⁾ 職人 *the artisan* は、自分の魂の欲望的 *desirous* ないし「エピテューメティック」

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

なエレメントを一つの特殊な職能への献身 *devotion* によって充たし、他の諸職能によってそれを充たす二者択一的な可能性だけを放棄するに過ぎない。統治者たちは、魂の「第三の部分」全体の何であれ、その一切の充足を断念する。^{レイナウンス} この断念 ^{リナウンス} によって、守護者たち *the guardians* は、階層としても個人としても、職人たち *artisans* が持っている一つの卓越性 ^{エクセレンス} を奪われる。一つの階層として、彼らは分業 *the division of labour* に基づく差異化された組織化を欠いている。分業は財の交換と富の追求との条件であり、そして、この分業を、われわれは「第一の国家」^{ステイ} と第三階層とをポリスと共に特徴づけるために、想定しなければならない。個人として彼らは欲望 ^{ディサイアー} のエレメントを欠いている。このエレメントをプラトンは魂の本質を成す諸エレメント間の第三のものにランクしている。アンドレイアとソフィアの諸々の可能性から遮断されて人間的な完成化 *perfection* を達成できないのは、職人たち *the artisans* だけではない。守護者たちもまた、そこなわれた人々 *named men* である。欲望を欠くことによって、彼らは享受あるいは生産する能力 ^{キャパシテイ} を欠いている。

われわれは次のことを見てきた。すなわち、魂の二つのより高次の能力^{フアカルティーズ}、精神的 spirited な能力あるいは理性的 reasonable な能力のいずれかは、それが守護者たちにおいて許されているように、それ自身の徳^{ヴァーテユ}を展開することが許されるならば、正義とは異なる一つの価値を^{ヴァリュウ}、かのもっとも困難な用語^{クーム}の諸々の意味の一つないし他のそれにおいて自由として定義（限定）されるかもしれない何かを、実現することを。同じことは欲望的 desirous なエレメントについても真実である。正義である理性的秩序を何ら顧慮することなく単純に欲望を充たすことは、自由の一形式である。お望みなら、それを「恣意的 arbitrary な」「誤った false」「消極的 negative な」自由と呼ぶこともできようが、しかし、それでもやはり、それは疑いなく自由である。⁽³³⁾ プラトン自身はそれを「エレウテリア」と呼んでいるが、しかし、それに対する彼の態度は、奇妙なことに、アンドレイアやソフィアという徳に対する彼の態度とは異なっている。われわれは、アンドレイアやソフィアという徳はそれら自身自由の諸々の種類である、と見たし、プラトンによってそうであると認められている、と見たのであるが。彼はこのエレウテリア（自由）

を正しい秩序とは正反対のものとなししているから、その結果、まさしく一ポリスの確^{エスタブリッシュメント}立は、その抑圧に依存することになる。

ソフィアの自由とアンドレイアの自由は、実際に、それら自身、正義の理想とは一致しなかった。それらを徳と呼ぶことは、各部分の間のバランスという価値を越える一つの内在的価値を、魂の二部分の活動に帰することであった。この不一致に直面して、プラトンは、自由に関する自分の生まれつつある nascent 理想を犠牲に供するよりも、むしろ正義に関する自分の元来^{オリジナル}の理想を犠牲にすることを、選択している。これらの自由はポリスにおいて撲滅されるべきである、と要求するどころか、ポリスは、その中でそれらの自由が育成され行使されるところの一つの枠組みを、提供すべきである、ということ⁽³⁴⁾を彼はポリスの本質として見るようになる。というのは、結局、その中でこれらの自由が現存することだけが、理想的国家を「第一の国家^{シタテイ}」の粗^{プルティツシュ}野な条件から区別するからである。あたかもプラトンが感じているかのごとく、欲望の自由は単純に正義に敵対的であったが、これら二つの自由は、何らかの形で正義を含み、かつ越えていた。欲望の自由

は正義を掘り崩したが、前者の二つの自由は正義を超越した。自由のこれら二種類の間を区別することは、ヘーゲルの理解と批判 the understanding and criticism of Hegel にとって何より重要であることが見出されることになる。

ヘーゲルは、プラトンの政治哲学に対する彼の基本的な批判として、次のことを何度も繰り返し返していることが見出されるであろう。すなわち、プラトンのポリスは魂のこのエレメントの抑圧サプレッションに基づいていたが、このエレメントは、それが抑圧されるのであれば、もはや法的秩序ローフル・オーダーに敵対し、場合によっては法的秩序を破壊するものとして、爆発的に顕現することはないのである、と。そして、この欠陥と対照すれば、近代国家の権能the mightはこの自由をそれ自身の中で受け入れ、その行使からそれ自身への活力を引き出しさえする余裕を持っている、と。しかし、『国家』篇のまさにこの批判は『国家』篇そのものの中に潜在している。この第三のエレウテリアをポリスから排除することは、ポリスが暗黙のうちにその中の統治階層と同一視されるかぎりでは、必要なことに思われる。なぜならば、欲望の自由は、統治者の卓越性とは一致しないし、秩序を守るといふ彼の任務タスクの遂行と

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

も相容れないからである。プラトンは、この同一視がそれに依拠している混同から、全く逃避しているわけでは決していない⁽³⁵⁾。しかし、もし彼がそうしていた「全く逃避しなかった」ならば、もし彼が、彼のポリスの計画が含意していることを、すなわち、統治者ではない従属者たちの階層the class of subjectsは国家ステイの不可欠integralな部分である、ということ、はつきり認識していたとするならば、彼は、欲望の自由へのいくらかの余地を許容することは、彼の国家にとってもまた本質的なことである、ということ、見ていたに違いない。統治者において禁じられていることは、従属者the subjectにおいては不可欠indispensableなものである。というのは、それなしには、それによって国家全体ステイの必需品wantsが供給される経済的活動もないであろうし、分業の経済的組織化もないであろうからである。やはり分業は、それが経済的階層に限定されるとしても、ポリス全体の国制がその上に建てられる構造である。

III

ポリスにおけるディカイオシュネーと魂におけるディカイ

オシユネーとは異なる事柄である。—このことをプラトンは充分自覚している。そして、これら二つの秩序が相互に依存していることよりも、むしろこれらが類比的 analogous なものであること—これを示すことに彼の議論は殆どどこでも献身している。にもかかわらず、一方のディカイオシユネーの成^{アチウメント}果が他方のそれを含意^{イムプライ}しているであろうということ、そして、善く均衡のとれたポリスがノモスに従属することは、個人としての人間の完成化 perfection である魂の中に、諸エレメントの均衡を生み出すであろうということ—こうしたことを『国家』篇が想定していることは疑う余地がない。⁽³⁶⁾ こうした想定は、われわれが「第一の国家^{シテイ}」と理想的ポリスのいずれを考慮するにしても、正当化される。国家の本質^{シテイ}が需要と供給の経済的秩序であり、そして各メンバーのアレテ^{ウオント}ーが彼の技能^{スキル}あるいは「彼が得意とするもの what he is good for」であるかぎり、それらの間に相互的含意 reciprocal implication の完全な繋がり^{ネックス}が存在する。一つの経済的組織は、熟練した（技能を持つ）職人たち skilled craftsmen の専門化された活動にのみ基礎を置きうる。そして逆に、技能はその発展のために組織化された経済的システムに

おいてのみ可能な一つの専門^{スペシヤライゼイション}化を要求する。

ポリスのディカイオシユネーがもはやテクナエ（諸々のテクネー）の組織化ではなく、三階層形層の維持と同一視され、そして、個人のディカイオシユネーがもはや技能としての自然的諸能力への形相付与 information ではなく、魂の三階層体制 threefold constitution の均衡^{バランス}と同一視されることになっても、両者間のこの相互的含意 reciprocal implication はなお続いている。この新らたな同一視によって差異がもたらされるが、国家^{シテイ}の徳も魂のそれも、もはやいずれもディカイオシユネーにおいて尽くされるとは概念把握されえない。職人^{クラフスマン}の徳全体は彼の技能^{スキル}であり、経済的社會のそれはその組織化である。すなわち、いずれの本質も実現された形相である。—その形相がそこにおいて実現されるところの質料^{マター}、人間という動物の自然的諸能力と、經濟社會を構成する諸々の仕事^{トイイ}（職業）とは、いずれも偶然的なものであるが。しかし、魂の三つの部分は、自然的諸能力が技能の発展のための質料であるようには、単純にその三階層形相の質料ではない。そして、一個の人間の徳は、一人の職人の徳が「彼が熟練して（技能を持って）いること」 his being skilled に尽くさ

れているとは異なり、彼が正しくあること his being just に尽くされていない。プラトンはこの差異を識別しようとしな。にもかかわらず、プラトンは、魂の二つの部分、その本質が諸部分の均衡にあるところのディカイオッシュネーという徳の上位 over and above に、それぞれ一つの固有の徳、つまりソフィアとアンドレイアを持っていること、このことをまさしく承認して、その差異を示唆している。三つの部分からなるポリス the tripartite Polis の諸階層もまた、「第一の国家」の諸々の仕事（職業）が経済的組織化に関連づけられているのと同じような仕方では、質料として、国制 political constitution に関連づけられていない。それ自身の一つの徳という潜在能力をもっているという点において、魂のプラトンの諸部分の一つが一自然的な能力とは異なるのと同じ仕方で、一階層 a class は一仕事（職業） a trade とは異なる。そして、その本質はその諸部分の形相に尽くされず、その徳はその組織の完成化に尽くされないという点において、人間の魂が職人の技能と異なるのと同じ仕方で、諸階層から構成された国家は経済的社會とは異なる。プラトンは、彼が三つの部分からなるポリス the tripartite Polis は「第一

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

の国家」のそれを超える一つの卓越性を成就する、ということを示唆するときはいつも、この差異を示唆している。しかし、彼は国制 political constitution を経済的組織 economic organization から区別することさえできないことによつて、それを識別することを妨げられている。

これはわれわれが『国家』篇全体の特徴であることを発見したところの手順 the procedure の一例に過ぎない。プラトンは、一つの概念的枠組みの中に、新しい諸観念を導入しつつあるが、それらはその中には収まり切らないであろう。そして彼は、新しい観念を發展させることも、古い観念を捨てることも、それらが同一でないことを知覚することに失敗したることによつて、妨げられている。繰り返しになるが、区別することのこうした失敗はプラトンの政治哲学全体にとって本質的なことであり、そして新しいものを排除すること、あるいは古いものを捨てること、このいずれかによつて強化された一貫性 consistency を追求するならば、はるかプラトン主義以下のものか、あるいははるかそれ以上のものか、いずれかである何かをそのことは生み出すことになる。

自由という概念は、古い壘を破裂させる新しい酒である。

自分の知恵を發揮する哲學者、自分の勇氣を發揮する兵士、金錢獲得を果たす生産者は、それぞれ、「魂の一部分」の完成化を実現するが、これは諸部分間の均衡以外のことである。それぞれの**實現**は、それぞれ違う意味で自由である。そして、それぞれの自由は、その成就のために、魂の他の諸部分を満足させることなく、犠牲にすることを要求していることが判明する。かくして、知恵が完全に成就されるのは、哲學者が欲望の拘束 *bondage* からだけでなく、あらゆる実践的活動から解放されるかぎりでのみである。魂の理性的部分 *the reasoning part* は、死が、哲學的訓練が始めた仕事を完成し、最終的に魂の劣った部分との繋がりを断ち切ったとき、それが果たしうる最高の徳を達成するのである。⁽³⁸⁾ 欲望は、それが理性によるあらゆる制御から自由であるとき、明らかにもつとも自由である。「第二の部分」の徳であるアンドレイアは、とりわけ、欲望の自由とは相容れないが、同じく理性の活動 *the activity of reason* とも相容れない。それは、實現化に際して、理性によって理解されたのではなく、信頼 *trust* に基づき信念 *faith* によって受け容れられた、理性的原理の行為において成就される。この信

念を、プラトンはオルター・ドクサー、正しい信仰 *right belief* と呼んでいる。そして、彼の想定によれば、その信仰が理性的理解 *reasonable apprehension* と異なるのは欠如によってのみである。しかし、その申し立てられる欠如こそ、それだけがそもそも一つの倫理的徳ないし性格の徳、アンドレイアを構成するところのものである。例えば、兵士たちが、いかなる事柄が恐れるべきことで、何がそうでないか、これについての「正しい信仰」だけを持っているかぎりで、危険な誘惑においてもこの信仰を維持することが勇氣 *courage* という一つの行為なのである。しかし、理解力が信仰の位置に取って代わったと想定するならば、もはや危険な誘惑はありえず、兵士は知恵という知的な徳 *the intellectual virtue* を実際に實現したということになるが、しかし、彼は勇敢である機会を失ったことになる。アンドレイアは異教徒的自由 *the pagan freedom* である。それは、一人の自由な人間を奴隷から区別する徳である。それは、ソクラテスの敵対者たちに、哲學的思弁にふけることは、自由人が利得の奴隷的追求に参加することと同じく、自由人として生まれた市民たち *the free-born citizen* (カロス・カガトトス)「善美

を備える人」の生まれながらの徳 the naive virtue を破壊するものである、と警告する、全く見当違いであるわけではない本能であった。ソフィアは、自由という一つの新しい理念であるキリスト教の先取りである。そして、二つの理念の相互的反駁(矛盾) mutual contradiction は、どんなアカデミーの舞台よりも広い舞台の上で戦われた一つの闘争を哲学の内部で反映したものである。

魂の諸部分が備えるいくつかの徳は、かくして三部分の均衡 the tripartite balance としてのディカイオシュネーという理想の中に単に含まれていないだけでなく、この理想に敵対的 antagonistic である。そして、それぞれはその実行のために一つの団ソサエティ体を要求するにもかかわらず、この団体は三部分からなるポリス the tripartite Polis ではなく、階層クラスである。哲学者は哲学者たちの一つの共同コミュニティー体、兵士は軍隊における一つの戦友団体 comradeship に、生産者は一つの経済的団体(社会)に属さなければならない。かくして、魂のいくつかの部分はそれぞれ、三身分 estates のうちの一組織においてそれに対応するものを見出す。これらの身分の組織は、ポリスにおけるディカイオシュネーと

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

いう理想に含まれていないだけでなく、それに対して積極的に敵対している。かの理想はそれぞれの身分と他の二つのそれとの間の相互依存 reciprocal interdependence という密接な関係を含意しているのに対して、それぞれは他の二つの部分から最大の可能な独立を果たすことによって、その成員の自由をもっとも善く確保しようように思われる。哲学者たちの共同体は、それを世俗世界 the world に結び付けている紐帯 the ties を最小限に縮小することによってその成員たちの自由をもっとも善く成就しよう。経済的組織は、それが目的に従う制御から解放されるときにのみ、その真の発展を達成しよう。

各々の身分は他の二つのそれとのその統一性ユニティから自由になれることで、その局所的制限ローカル・リミテイションから自由になれる。第一身分はカトリック的兄弟関係ブラザーフッドとなり、第二身分は世俗的範囲の騎士道制度 a world-wide chivalry となり、第三身分は法(則)の一普遍的コードによって安全の保障された私的所有の一システムとなる。これらの団ソサエティ体(社会)のいずれも、もはや政治ポリス的なものではない。各々は一つの法(則)に基づいている。これは、その用語の一つあるいは他の意味におい

て一つの自然法(則) a natural law である。

ディカオシュネーは、魂の三階層形相 the threefold form of the soul としては、その諸部分を単一の人格 personality に統一する結合環である。ポリスの三階層形相としては、それは三階層を一つの政治的結社に融解する絆である。プラトンは、魂のディカオシュネーは全ての人間的な徳を含んでいる、と誤って考え、そしてそれゆえに、彼の国制 political constitution は全ての人間的な卓越性の実現のための枠組みを提供する、と誤って想定している。しかし、個人的な魂 the individual soul の内部における諸部分の統一化と一つの個体的な国家 an individual state における諸階層の統一化とは相互に依存している、という彼の主張(論旨)は、自由の分解的影響力 the solvent influence の下での一つの統一体の解体(脱統合) disintegration がそれに伴って秩序の解消 dissolution をもたらした、という省察によって正当化されている。近代という時代の曙は、さらに二つの理想の同時的再生によって特徴づけられる。人間の魂の完成 perfection は、その全てのエレメントを一つの個人的人格 individual personality の中に融解する fusion にある、

ともう一度概念把握されるように、人間の社会の完成は、その諸階層を一つの国民国家 a nation state の中にもう一度統一化すること unification に置かれることになる。

個人と国家との間には基本的な対立がある、という受容さされているドグマは、「個体的」individual 「という言葉」に結び付けられる意味に応じて、真実であるか、あるいは真実の正反対である。その章句は、一般的には、二つの異なる対立を、すなわち、国家の法(律) laws of the state と個人の良心 the individual's conscience との間の対立、そして、国家の法(律) と個人の利害 the individual's interest との間の対立を、含んでいるのを常としている。これらは、それぞれ純粋な対立である。良心は、プラトンがヘト・ロジスティコンと名づけた魂のエレメントであり、そして、それは、その完全な自由のために、実際一つの法を、しかし、ローカル・リミテイション 局所的制限を超越する一つの法を、要求するように思える。個人の利害は、プラトンが個人の魂の第三エレメントと呼んだものを満足させることであり、このことは、諸々の経済的モチーフが自由に演じられる一つの社会に個人が帰属していること、これを含意している。このような社会の諸々の

法は、われわれがこれらの法を所有・財産の維持のための諸規則ルールズのシステムとして考えるにせよ、このようなシステム内部で経済的活動によって開示される法として考えるにせよ、一つの個体的な国家ステイトの実定法 the positive law のように、どんな領域テリトリアル・リミテーション的制限にも服していない。

これらのケースのそれぞれにおいて、国家 the state に対する個人 the individual の対立は、個人が一つの普遍的社会に帰属していることに依存している。しかし、それぞれのケースにおいて、この広い社会に個人が帰属することは、「彼の魂の諸部分」の一つに残余の部分を排除させることになる。そもそも、われわれがそれらについて個人と国家ステイトの対立として語ることができるのは、われわれが進んで個人を彼の単一の部分 a single part と同一視するかぎりにおいてに過ぎない。しかし、もしわれわれが「個人 individual」で意味するのが魂のあらゆる部分がそこで統一されるところの一人格 a personality であって、残余の部分を排除するにまで展開されたそれではないとするならば、一つの国民国家 a national state の中にこれらの普遍的諸社会を融解させることは敵対的 antagonistic なことではなく、人格のこのよう

な発展に客観（客体）的に対立する部分であり、その発展の必要条件である。現実に存在する対立は、国家 the state の中への吸収に対する諸社会 the societies のそれと、個人 the individual の中への吸収に対する「魂の諸部分」のそれとの両方である。これらが、「個人と国家ステイトの対立」ということによって曖昧に意味されていること、しかし混乱して表現されていることである。

再生 a renaissance は単純な再帰 a simple recurrence ではない。魂ないし国家のいずれかの統一ユニティとしてのディカイオシュネーというギリシア的理想を単純に再建することは不可能であった。ディカイオシュネーは自由を排除した統一体であった。人格 personality と国家 state の両方の近代的概念は、自由に基づく統一体というそれであった。

これは、そのことにおいて国家 the State についての近代哲学がポリスについての古代哲学と異なり、そのことにおいてとりわけヘーゲルの政治哲学がプラトンのそれと異なっただけでなく、異なることが彼自身によってはっきり認識されたところの、基本的論点である。近代国家は自由に基づいているのであって、プラトンのそのように自由の排除に基づ

いているのではない、とヘーゲルは倦むことなく主張している。この差異を十分に理解するためには、この間に介在する期間の哲学を理解しておくこと、そして、とりわけ、いかにしてプラトンにおいて萌芽的であった自由の諸観念が中世のキリスト教哲学において展開されたのか、これを見ておくことが必要であろう。このことを、わたしは疑わない。もちろん、わたしはこのような仕事を企てることを提案しないが、その代わりに、わたしは、言わば、それによってヘーゲルが彼自身の政治哲学を説明しているところのプラトンの政治哲学、この批判を考察することによって、近道や脇の入り口を通じて、国家 the State についてのヘーゲル哲学にアプローチすることに努めるつもりである。偉大な哲学者たちは、いつも自分たち自身に先行する者たちの最善の批判者、あるいは自分たち自身の顕著な重要性の判定者であったわけではない。しかし、われわれは、ヘーゲルに伴って、他の哲学者たちに伴ってなら誤解を招くことになるような失敗をし難い一つの方法を、企てるであろう。なぜならば、ヘーゲル自身は最初の哲学史家であったし、かついまなおもつとも偉大なそれであるからである。

〔補説〕 C プラトンにおける教育と統治

ἀρχή と *ταυτεία* はプラトンにとって置換可能な用語である。かくして、彼は第九卷590e ㄱ' [*ἡ τῶν παιδῶν ἀρχή, τὸ μὴ εἶναι ἐλευθέρους εἶναι, ἕως ἄν ἐν αὐτοῖς ὄσμερ ἐν πόλει πολιτείαυ καταστήσμεν...*]「子どもたちを統治(支配)すること(アルケー)、われわれが彼らの内に、ポリスの内にと同じく、国制(ポリリーティア)を打ち立てるまでは、彼らを自由に放任しないこと…」について語っている。この文章の後半は、そこに達することで、生徒がポリスの自由で責任を担いうる主体サブジェクトになるところの、教育過程には期限があること、このことを含意しているように見えるかもしれない。しかし、これはそういうことではない。ポリスにおける従属者サブジェクトの生活は、彼の生徒である状態と同じ広がりを持っている。その過程の期限は、彼が、自由な一主体にはなく、一統治者に、すなわち、彼自身が今度は一教育者になる資格を与えられる時点である。

統治(支配)することと教育することの同一視は、さらに第十卷599d-600a によって例解されるだろう。そこでソクラテスはホメロスの要求する知恵について論じている。〔ἄν

φιλε "Ουμπρ, εἶπερ μὴ τρίτος ἀπὸ τῆς ἀληθείας εἰ
ἀρετῆς πέρι, εἰδῶλον δημουργός, ὃν δὴ μμητῆν
ἐπιτάμεθα, ἀλλὰ καὶ δευτερος, καὶ οἶος τε ἦσθα
γυνώσκειν ποῖα ἐπιτηδεύματα βελτίους ἢ χείρους
ἀνθρώπους ποιεῖ ἰδιὰ καὶ δημοσίᾳ, λέγε ἡμῖν τις τῶν
πόλων διὰ δὲ βελτίον ἐκκεῖν...; δὲ δὲ τις αἰτιᾶται
πόλις νομοθέτην ἀγαθὸν γερονέναι καὶ σφᾶς
ἐφελκέναι。「親愛なるホメロスよ、もしあなたが人間の
 徳性について、真実から遠ざかること第三番目の人、われわ
 れが真似師と規定したところの影像製作者ではなくして、む
 しろ第二番目にまで達している人であるならば、そしてどの
 ような仕事が公私において人間を向上させ、あるいは墮落さ
 せるかを認識できたというのであれば、…あなたのおかげで
 統治が善くなった国というのは、いったいどの国であるの
 か?」立法者の仕事は人々をより善くすることである、すな
 わち、教育者の仕事と同じである (cf.600c 「*παιδεύειν*
ἀνθρώπους καὶ βελτίους ἀρεπράξασθαι」 「人々を教育し、
 よりすぐれた者にできた」)、ということでの想定は、明らか
 である。そして、続く文章はより印象的である。「ἀλλὰ δὴ

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

εἰ μὴ δημοσίᾳ, ἰδιὰ τισὶν ἡγεμῶν παιδείας αὐτὸς ἕων
λέγεται "Ουμπρς γενέσθαι]「もし公にはそのようなこと
 が何もないというのであれば、私的な面で、ホメロスが彼自
 身の存命中に或る人々の教育上の指導者となったであろう
 か?」(600a)。一個の政治家であることと一個の教育者で
 あることの間それぞれとしてわれわれが表現する二者択一は、
 プラトンにとっては単純に「公的に」教育することと「私的
 に」教育することとの間の二者択一として呈示されている。
 ここでは、他のところと同じく、プラトンは古典時代のギ
 リシア人の実践を支えている諸原理を省察している。私的教
 育は重要ではなかったが、国家ンテイにおける生活は市民たちの学
 校であった。どうすれば自分の息子を最善に教育できるか、
 と問うた父親に与えられた答え、「彼を善く統治された国家
 の市民にすることによって」を比較されたし。

注

- (1) 卅 376b ff.
- (2) 卅 381c, d
- (3) その規メタ準ンダは、もちろん、功利主義的なものではない。
 正しい摂生(養生) the right régime は、患者が最も享受

enjoyしようとするけれども、快樂あるいは苦痛の回避のための手段として望ましい健康状態でもなく、患者を善きものへにしようとするものである。しかし、他方では、その規準は、快樂に全く無関心な正義の法でもない。一人の患者を善きものにするへことは、彼を彼のタイプの完璧な一見本 specimen にすることである。そしてこのことは、実際には、快樂への彼の諸々の潜在能力が、それらが果たしうる完全な満足を受け取る、ということを意味している。

- (4) いかにかに密接に、この問題において、ギリシアの諸都市国家がプラトンの理論と対応しているか、これを指摘することとは、殆ど余計なことである。司法judicatureと統治governmentとの間には何ら区別がなかった(あるいはきわめて萌芽的なそれしかなかった)。それらは死刑 a capital punishment—懲罰 discipline の道具には決してなりえない刑罰—を持たなかった。そしてそれらの法が効果を持った operated のは、刑罰を通じてというよりもむしろ報復を通じてであった。これらの事柄は、近代国家において動物、精神障害者、子どもに保存された処置に特徴的なことである。

(5) 解説のために、補説Cを参照。

- (6) この想定は、もちろん、プラトンに特異なことではなく、ギリシア思想を特徴づけるものである。ある人々は統治するために、他の人々は統治されるために生まれる、というアリストテレスの教義を参照。それは奴隷制の実行についての理論と対応する。

(7) Ch. I, p. 28 *sup*

(8) Ch. I, p. 21 *sup*

(9) あるいは、より正確を期せば、自由の一つの理想、すなわち合理主義者。See pp. 56ff.; and cf. p. 61, n. 1.

(10) このことは、アンドレイアとソフィアについて、もっとも明瞭に真実である。これらは一つの積極的かつ内在的な価値を持っていると想定されるからである。しかし、それは魂の第三の、ないし欲望的 appetitive な、エレメントについてもまた真実である。それは、人間の実現化にとつて、それがこれに敵対的である点で、偶然的以上であるからである。

(11) 「第一の教育」は、ii. 376e と iv. 445e との間で記述されている。第七巻は「第二の教育に献じられている。わたしはここでは、主に (*avopeta* ではなく) *σάφροσυν* を産み出すことが目論まれた、「第一の教育」についての部分(第二巻のはじめ376e—第三巻404e)への言及をオミットした。しかし、わたしが他のところ(補説D参照) *σάφροσυν* について述べていることが、ある程度このオMISSIONを埋め合わせ、かつ説明することを、わたしは望んでゐる。

(12) The "spirited" element.

(13) e.g. ii. 375a

(14) iv. 430b

(15) iv. 440e

(16) As Plato illustrates, iv. 439e ff.

(17) Cf. iii. 386b.

(18) τὸν καλοῦ ἔνεκα. アリストテレスのフレーズ。

(19) Cf. p. 47 *sup*

(20) iii. 387b.

(21) Cf. iii. 387b. (...) ‘...ταυτὶ καὶ ἀνθρώπῳ οὐδὲ δεῖ
ἐλευθεροῦ εἶναι, δουλείαν θανάτου μάλλον
πεφοβημένους (子どもでも大人でも、死よりも隷属のほ
うを深く恐れる自由な人間とならねばならない人々) — こ
うでは ἐλευθερός (自由人) と ἀνδρείος (勇者) とが明
確に交換可能な用語である。

(22) οἰκῶν τὸ μὲν κρείττω αὐτοῦ γελῶν (ii) の「おの
れに克つ」という言ひ方は、「おかしくはないかね?」iv.
430e

(23) Νοφία は「アンドレイアのように」はじめは、それに
よって番犬が自分の家族を識別しうるところの自然的能力
と類比的な—自然的能力の完成化として、導入される (ii.
375d—376e; cf. the significant concatenation *ibid.*
φιλόσοφος ὄν καὶ θυμοειδής καὶ ταχύς καὶ
ισχυρὸς ἡμῶν τῆν φύσιν ἔσται ὁ μέλλων καλὸς
καγαθὸς ἔσεσθαι φύλαξ πόλεως (われわれにとって、
ポリスのすべれて立派な守護者となるべき者は、その自然
本来の素質において、知を愛し、気概があり、敏速で、強
い人間である)。あたかも、これら四つの属性は全て等し
く自然的なものであるかのよう) が、しかし、たちまち
この元来のコノテーションから脱却する。

(24) プラトンが実際に「自由」を φιλόσοφος の帰している
印象深い章句 (vi. 468a, b) がある。哲学者の自然本性と

『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(2)

もつとも縁遠い性質は ἀνελευθερία (自由ならざるこ
と) である、と彼は述べている。この性質は
εὐκπολογία、魂がどうでもよいことに拘泥すること
(瑣末な詮索、吝嗇) と同一視される。そして、σοφία が
これを追放するのは、魂を「全時間と全存在」の見るに値
するもの the spectacle に向けることによってである。—
これと比較して、ὁ ἀνθρώπῳ βίος (人間の生) の諸々
の関心事は、相対的な意味を持つそれらに相応しいランク
に帰される。ここでは再び、ἐλευθερία が奇妙に制限さ
れた意味で使われている。しかし、その概念は明らかに、
キリスト教徒の禁欲主義者が現世拒否 renunciation of
the world によって達成しようと奮闘した自由を先取りし
ている。

(25) ロコスとト・ロキスティコンはどちらも「理性」「rea-
son」と翻訳できるであろう。しかし、前者は抽象名詞の
意味での「理性」であり、後者は能動の動詞の主体であり
うる意味での「理性」である。ト・ロキスティコンは、ロ
コスとは異なり、真実を実現する潜在的な力 a potency だ
はなく、顕在的な力 a power である。つまり、δυναμὴς
ではなく、δυναμῆνον である。ライブニッツがモナド the
monad に つづつてつづかひで述べているように、*“pouvoir”*
ではなく、*“puissance”* である。この差異の重要性につ
いては、こちらに第三章を参照。

(26) 第九巻において、τὸ λογιστικόν は、τὸ θεῖον ἐν
ἡμῶν (われわれの中の神的なもの) と呼ばれている (589
d; cf. *ibid.* e, 590d); それはまた、τὸ ἀνθρώπῳ ὁ

- εὐτος ὑψηλός* (その人間の内なる人間) (589b) と呼ばれている。これは、それが人間の本質である、という結論を示唆している。(その結論はアリストテレスによって明らかにされた。δοξαι δ' αὖ καὶ εἶναι ἕκαστος τοῦτο [sc. τὸ κρείττον τῶν ἐν αὐτοῖς], εἴπερ τὸ κρείττον καὶ ὑψέον。[A]のもの(自己のうちなる最高のもの)が、われわれにおける支配的なるものであり、より善きものなのであってみれば、各人はこのものであるときを考えられてよ。Ethi. Nic. X. 1178a) 人間の本質は合理的動物である、と述べることに含まれている教義とは全く異なる、人間についての教説が、人間の本質は彼の中の神的なものである、と述べることに含まれている。
- (27) τὸ ἐπιθυμητικὸν ἰσ κομμάτων φύσει ἀκλήροτατον。(欲望的部分)はクレーマートン フェセイ アプレーステマートン(金銭を渴望する部分)である。IV. 442a
- (28) κομματιστικῆ。
- (29) I 345b ff.
- (30) iv. 434b, c. κομματιστῆς φύσει (自然本性からして金銭を求める人)であることは、したがって、一人の人間から守護者階層のメンバーシップの資格を奪う。IV. 433a, b, cf. iii. 415e, and even i. 346c
- (31) iii. 397e.
- (32) *ibid.* (ὅτι κομματιστῆν πρὸς τῆ πολεμικῆ [戦争の他に金儲けをした])
- (33) 自由は、近代哲学の経験論的伝統においては、その言葉のこの意味に制限された。「自分の力と才気によってなし
- うることに、自分がなそうとする意思を持っていることをなすことを妨げられない人こそ、自由な人間である。」ホッブズ。他方、合理論者たち(とりわけカント)は、自由を、道徳的行為に、すなわち、理性の意識的理解力に統御された行為に、制限した。それぞれの概念の萌芽は、プラトンの中に見られる。前者については、κομματιστῆς(金儲けをする人)の *ἐλευθερία* (自由) において、後者については、統治者の *σοφία* において。
- (34) viii. 555b-565e, とりわけ 557b における民主制と「民主制的人間」とについての記述全体を参照。: *ἐλευθερίας ἢ πολις μεστῆ καὶ παρηγοίας γίνυεται, καὶ ἐξουδία ἐν αὐτῇ ποιεῖν ὅτι τις βούλεται* (A)のポリスには自由が支配していつ、何でも話せる言論の自由が行きわたっているとともに、そこでは何でも思い通りのことを行うことができる(562b and c (*ἐλευθερία* は民主制の目的である)。*ἐλευθερία* ἢ ἡμῶν ἢ ἄλλων δουλεία ἢ ἰσχυρῶς ἐναντιοῦνται)。民主制の自由を最終的に踏み越えることは、奴隷の解放である (563b)。
- (35) ギリシアでは奴隷階層が市民権 citizenship から排除されている。このことは、国家が支配社会層以外のものによって構成されるということを、通常のギリシア人は同じく理解(概念把握)できない、ということを示唆している。
- (36) Cf. iv. 445c ff.
- (37) あるいは、それが一有機体以上のものである、という点において。

(38) 第十卷五八八以下において、プラトンは、魂の最高の部分の完成化にとって、それが「この生(活)」の諸々の必要によってより劣る諸部分に拘束されることは、有害なものと明確に見なしている。

(39) iv. 429e